

平成27年度 第3回豊橋市総合教育会議議事録

平成27年10月15日 開 催

豊 橋 市 教 育 委 員 会

| 第3回 総合教育会議 | |
|-------------------|--|
| 日時 | 平成27年10月15日(木) 午後3時～5時30分 |
| 場所 | 市役所西館7階第1会議室 |
| 構成員 | 佐原 光一 市長、朝倉 由美子 教育委員長、 高橋 豊彦 教育委員長職務代理者、芳賀 亜希子 教育委員、 渡辺 嘉郎 教育委員、加藤 正俊 教育長 |
| 事務局 | 加藤 喜康 教育部長、金子 尚央 教育部次長、 村田 敬三 教育政策課長、山西 正泰 学校教育課長、 森田 教義 生涯学習課長 中田 浩次 教育政策課主幹、久野 哲司 教育会館長 ほか全13名 |
| その他 | 傍聴人 2人 |

議 事 日 程

協議事項

- 1 学力・体力の向上について
- 2 子どもを取り巻く教育環境の現状について
- 3 今後の協議事項について
- 4 その他

報告事項

- ・新教育委員会制度への移行(総合教育会議、大綱、新教育長)に関する調査について

連絡事項

- ・次回開催日程

- | | |
|-----------|-----------------------|
| 11月12日(木) | 第4回(教育振興基本計画)(予算：非公開) |
| 2月 | 第5回(教育振興基本計画、大綱) |

(市長)

それでは第3回目の総合教育会議をお手元の次第に従って進めます。協議事項1「学力・体力の向上について」を事務局から説明をして下さい。

■学校教育課長 協議事項第1号について説明(別添資料)

(市長)

これについて、意見があればお願いします。

(朝倉委員)

新聞にも載ったが、各教科で小学校の愛知県の平均が全国と比べて下回っているものも見られ、差が大きい部分も見られる。中学校になって上昇してくるので、小学校の時点を引き上げる方法を考えることが良いのか。

(高橋委員)

今まで受けた説明の理解では、偏差からいうとかなり詰まっている中での順位なので、正答数の1つ2つがかなりの差になる。だから順位にあまりこだわるのはどうかという話であった。小学校が少し悪いが、中学校で盛り返しているという特徴がある。前回市長にもお願いしたように、教科担任制の予算措置が進みつつあるので、そこをどう活用していくかが大事。

(市長)

小学校6年生の応用が良くないことが気になる。

(高橋委員)

応用とか問い方という話になるが、昨日、芳賀委員とともに二川南小学校の研究授業に参加させていただいた。少し気になったのが4年生の理科の授業で、たまたま、水の対流の話をしていて、「動くのは水なのか熱なのか」。「水と思う人」、「熱と思う人」という聞き方をしていて。私はどちらかだけでなく、他もあるよという聞き方、「両方とも」、「どちらでもない」を含めた4つの選択肢でなぜ聞かないのかと思った。ちょうどノーベル賞の話があり、ノーベル賞を受賞する人は、「いや違う、そうではない答えがあるはずだ」ということをやってきた人がああいう形になっていると感じた。

(市長)

先日プラットで詩人の谷川俊太郎さんから聞いたのだが、ある授業を見に行った時に、折角だから教科書に載っているからと谷川さんの詩を教材として扱った。その中で、先生が生徒に「作者の意図するところはどうでしょうか」と質問をした。生徒がいろいろ答えると、「いや違う」、「いや違う」と先生が答えて、「答えはこうだ」と言った瞬間、谷川俊太郎さんは、「私はそうは思わない」と答えたそうです。そうですよね、色々な答えがあつていい。谷川さんは、自分の詩の答えを間違えるとは思わなかったそうです。

答えはそれぞれの人がどう感じたか、もちろん数学などで間違っはいけないこともあ

るが、それでもどう考えてこの間違いが出てきたかの過程が大事なこと。

(高橋委員)

私たち教育委員会という立場だからかもしれないが、市長とこの会議を行うというのは、最終的にこの市がどういう競争力を付けていくかということであり、市長も興味があることだと思う。

(市長)

教育がしっかりしているということは市の大変大きな要素だし、競争力の糧になると思う。単に学力をつければ良い、体力をつければ良いということだけでなく、目指す教育というものが、ニーズにあっているか、その人たちの考え方にあっているか。人によっては公文式のようなものが良い、全く逆が良いということもある。将来何になりたいかでも変わる。沢山の考え方があるが、保護者が子どもをこの学校に送りたいという気持ちも雰囲気を始めそれぞれ違うところにある。学力・体力にどう取り組んでいるかも当然あると思う。

(渡辺委員)

学校は単に正解を教えるところでなく、考えさせるところであってほしい。

(市長)

考えさせる場所だし、成功体験を重ねる場所であり、自分が分かって良かった、できるようになって良かった、考えられるようになって良かった、そういう積み重ねができるところであってほしい。

(朝倉委員)

また、どんどん失敗を積み重ねていけるところであってほしい。

(市長)

失敗もして、その結果として成功した時、得られるものはすごく大きい。ただ一方で、そこまで学校に余裕があるかという問題もある。

(高橋委員)

最近私は、多様性という言葉を大事にしている。成長社会でなくなった中で、これから多様性を認めることが逆に競争力になるのではないかと考えているから。しかし、点数をどう上げようかという話との矛盾を感じてはしまう。

(市長)

問題は、どういう所が弱点かを探ること。

(高橋委員)

点数を上げれば良いというなら枠組みにはめれば、多分素点は上がる。

(渡辺委員)

それは評価の問題で、評価が正しいかということもあるが、評価ができるかという問題もある。

(市長)

もう一方で、色々なステップを踏んでいく段階には、点数で評価されることも必ずある。

それをどう乗り越えていくかがもう一つにある。

(渡辺委員)

この世の中では乗り越えなければならないハードルがあり、その場合は、どうしても点数で評価されてしまうことがある。それが本来の学力かという問題ではある。

(高橋委員)

そこをバランスの中で豊橋らしさをどう探っていくか、ということの議論が必要。

(市長)

点数を上げるためには、学校で類似の問題を何度でもやらせればいいわけで。そんなことで点数を上げて意味はない。

(渡辺委員)

テクニックだけ教えるということに偏ってしまうのは良くない。

(朝倉委員)

算数でも、同じ式なのに数字が代わると計算できないという子も中にはいる。間違えたところから、何故ということ分かるようにしてくれるような先生に時間の余裕、もしくは先生を補佐する人がいると良いのか。分からない子が分かる子に引っ張られて、先生に「もういいから答えだけ教えてよ」となってくると、その子が理解したことにはならない。どちらかという失敗から学ぶことの方が良いのだが、それだけの余裕がないかもしれない。

(市長)

自分の経験で、一番よく勉強したのは人に教えるとき。自分は気付かずに、たぶん何気なく分かったつもりになっていたことが、人がつまづいている部分の原因を考えたことが勉強になった。

(渡辺委員)

主体的に学ばせるためには、一斉講義的な授業は効果が薄い。

(高橋委員)

平均点という中身の中に色々な群がある。社会変化の中で、多分、女性の社会進出という名目も含めて、共働きの人が増えることは止まらないという現実がある。豊橋固有と言って良いのが外国籍児童の問題。そのように分けていったときに、それぞれどういう多様性が生き生きとするのか。外国籍の問題だけでなく、家庭環境の中で学習環境がうまく保てないことを色々なところで聞く。その子が優秀か優秀でないかということではなく、機会がない。そういうことを担保する仕組みが、実は学びに直結するのではないかという気もする。

(市長)

学校の先生の中で負の循環、負のスパイラルの話というのは話題になりますか、見ていて感じられますか。

(事務局)

そういう家庭の子どもの学習環境の状況は確かにあります。

(市長)

先ほど出た、外国籍の子どもの成績の状況というのは今回どうだろう。いくら日本生まれが多くなったといっても、日本語を書いたりする機会はどうしても少なくなる。

(教育長)

生活日本語はある程度の期間を生活しているからしゃべれるが、学習日本語の理解はなかなか大変です。

(教育長)

学習指導要領の変遷を見ていくと、平成元年の学習指導要領の改訂で指導法のメスが入り、大きく変わった。結局、学力観が変わらないと指導法は変わらない。対応が早かったのは小学校。問題解決的な授業展開は時間がかかるが、小学校ではある程度可能。ところが、中学校では15の春という高校入試が控えていて、入試において記述式で考え方をみるというのは、客観性とか採点とか様々の理由で難しい。学校の教員は、問題解決的な授業に切り替えたいという理念は分かるが、全部扱っておかないと心配で仕方がない。最後は点数になってしまうので、相も変わらず中学校では小学校と違って、教科書を中心とした知識理解という部分についての授業から大きくは抜けきれない。

そこで、豊橋市では、年間1単元でいいのでダイナミックに問題解決的な授業を扱ってくださいということをお願いしている。そこで経験した子ども観や授業観で教師が変わる。ある生徒が反応した時、立ち止って皆に投げかけていくというように教師が変わっていく。学力テストのA問題は知識理解的なものなので、意外と中学校の愛知の結果は、全国の中でもレベルの高いところにいる。その辺をどういう風に見ていくか。

(教育長)

分析結果を見ると、読書量は結構ある。資料を使ってどうやっていくかを先生たちが立ち止ってしっかりやっていくことが必要。

(市長)

今回、一番違うのは、分析結果を先生のところまで届くようにしたということ。

(高橋委員)

P D C A サイクルを学校現場でスタートしたということですね。

(市長)

「平成27年度全国学力・学習状況調査・豊橋市小中学校学力検査結果まとめ」の家庭・学校に関する結果の家庭生活の部分を見ていると、子どもたちの回答で、ゲームをする時間が問題になっているが。

(渡辺委員)

家庭生活・家庭学習・学校生活の方が確かに心配。驚いたのは学校図書館がほとんど利用されていないということ。学校の図書館が使いにくい状況にある。

(教育長)

従前の図書室は、学校の最上階の奥にあって鍵がかかっているというイメージだった。今は、読書だけの機能でなく様々な学習資料がある図書館、調べ学習のための学習センターとしての図書館として、校舎改築などの機会をとらえてできるだけ子どもが使用しやすい中央につくり、対応する人が常駐する形にしている。国もそのことを応援している。

(渡辺委員)

教室図書は良い取り組みだと思う。スマホを持っているとスマホで調べるので図書館に行かないのではないか。

(市長)

今日、幼稚園・保育園のPTAが来ていたので、「スマホは子どもに使わせないでほしい」と言ってきてしまった。色々な人が勝手にいっぱい載せているから、スマホで検索したモノが正しいかどうかの検証ができない。

(渡辺委員)

情報リテラシーという学問体系を子どもにしっかり教えなければいけない時代になってきている。

(渡辺委員)

子どももそうだが、親の問題もある。家庭生活・学習のところをみると、親の理解不足の問題、外国人の問題、経済の格差の問題もある。

(市長)

経済の格差により、親や家族も学習することの大切さを理解できていない場合もあるため、学習機会の場所を準備しても学びに来る人が限られてしまうことがある。

僕らの頃はもっと家庭での経済格差があったが、乗り越える力を持つ者も多くいた。しかし、今はよじ登る力が弱い。例えば東大へは、昔は訓練しても入れない子は入れなかった。もっと前の人たちは、本当に光るものを持った子しか入れなかった。僕らの時代になって頑張れば入れるようになった。大学の先生が一番困っているのは、そこでは本当に光る子をなかなか見つけられないこと。

(高橋委員)

昔はそこそこコミュニティがあった。近所で勝手に晩飯を食べてきたのが不思議でもなし、家庭環境という前に小さい頃から気にかけてくれる大人がいた。駄菓子屋がコンビニになり替わり、社会の変遷を見ると揺るがしようなない事実として、そこそこ気にかけてくれる大人と接する機会が今の子どもたちは絶対的に少ない。

(市長)

大人の数は今の方が圧倒的に多い。昔は、町の大人は駄菓子屋のおばちゃんとか、八百屋のおじちゃんとかしかいなかった。子どもはうじゃうじゃいた。

(高橋委員)

気をつけたいこととして、定例会でも話をする中で、面倒を見る見ない話で追い込むと、結局マイナス効果になるのではないかと議論があった。豊橋は、こういうところだから

住みやすいよねと、大人がちょっかいを出すような仕掛けでつながる気がする。今、羽根井校区でやっていますよね。すると結構な人数の人が来る。そうこうしている間に自分の親が入っている、そして、自分の子がいなくなっても親はそのまま取りこまれている。

(市長)

それぞれの家庭が独立しているという聞こえがいいが、孤立している状態を解きほぐすことが必要。昔だと、「どこかのおじちゃんに叱られちゃった」と言うと、「馬鹿、お前が悪いんだ」と言われた。今、「どこかのおじちゃんに叱られちゃった」と言うと、そこに親が乗り込んで行って、「どうしてうちの子を叱るんだ」というパターンの話を聞きます。お互いの価値観を受け入れない。私が、電車の中で悪ふざけをしている子どもをたしなめると、親から睨まれて「うちの子は私が育てます」と言われる。

(高橋委員)

昔より、豊橋だけでなく日本全体の問題として密室性が高い。その中で何も言えずに、子どもだけでなく大人も悩んでいることが構造的にあるのではないか。

(市長)

そういう意味では、今回のラグビーの頑張りなんかは対応性という問題で、皆で新しい目標を持って、皆で一目散に工夫をして頑張ると言うことがすごく良い。はるか雲の上の人がやっていることだが、自分たちにも使えそうなところがいくつかある。最初はすごく反発されたのに、受け入れられるそこが何なのか、何故受け入れられるようになったのか。

(朝倉委員)

今の親は子どもの物質欲の部分は満たして、親がそれで育てていると勘違いしている。精神的な部分は物で変えてごまかしている。実際に大学生を見ていて、この子がこれで親になれるのかなと心配になる。しゃべれる子もいるが、全然しゃべらないし、何か言うところ「いない」、「好きじゃない」、そういう自己主張しかない。その場で、自分で何か動くかということ、言われるまでジーンと意見も言えない。親は自分では育てていると思っているが、子どもの世話だけをしている部分で足りない部分を補充しているのではないか。その部分で気持ちとか欲という部分が育っていない。周りを見ようなどの見方を親自体ができていない。

さっきの「叱られるからやめなさいよ」という話にしても、昔も「お巡りさんに叱られるからやめなさい」と言うと、お巡りさんは、「それは私がすることではなく、お母さんが叱って下さい」と言う形があったのに、「それはお巡りさんが叱ることですよ」と責任転嫁している部分があるのか。それでいいのだという人が親になってきており、見方をどこかで変えないといけな。ネットの中で言っている世界の方が正しいと言って同調しているが、外では誰もしゃべらない。

(高橋委員)

テレビの取材の中で、今の子どもたちは政治に興味がないのではなく、むしろ昔より考えている子どもが多いのに、口にする世界から外れてしまう気がして、リアルの世界で表現しな

いと言っている子がいた。枠から外れることへの恐怖心が多分何よりも先にきてしまう。

(渡辺委員)

今、世の中に悪平等と個人主義がはびこっている。子どもの個性を認めてあげたい。ただそこが個人主義と混同されてしまうと問題。自己肯定感が低いのが一番気になる。子どもたち一人ひとりを認めていくことを積極的にすることが必要。

(市長)

私たちの時代と比べると、学校の授業で明らかに自分の意見を言う機会を増やしている。それなのに社会に出ると何故意見を言わなくなってくるのか。学校で自分の意見を言っているつもりでも、その段階ですでにフィルターがかかっている他の子と違う意見を持っているのに、自分の意見を言っはいけないということがあるのか。答えが先にあるとそういう気持ちになるのか。

(教育長)

いや、そんなイメージはないのではないか。特に小学校では、話し合い、交流の場として自分の意見を言い合う機会を広げている。

(市長)

そういう子どもたちが社会人になって何も意見を言わなくなってしまう。大学の授業ではどうですか。活発に意見を言うのですか。

(芳賀委員)

そういう授業もあれば、そうでない授業もある。

(市長)

言うときは、突拍子もないことを言って、「笑われちゃった」なんてで済んじゃうのですか。落ち込みますか。

(芳賀委員)

言う子は落ち込まない。逆に分かる子は言わない。言える子はここも気にしていないから落ち込まない、という可能性がある。

(朝倉委員)

自分がその中での順位ができていると、私が言ってもと思って言わない。

(教育長)

例えば、小学校3年生で小数点の1.3などを習い、4年生で100分の1までやる。黒板へ1.76と書いて、「いちてんななじゅうろく」と読んだ子を他の生徒が「違うよ」と言った時、先生がどう扱うか。「皆が言うように、「いちてんななろく」と読むのだよ、これから気をつけようね」と言ってしまうと、皆の前で恥をかかされた、「先生嫌いだし、算数嫌いだ」となってしまう。

間違ったことを言ったときの対応で、一人の子どもの考える力をそいでしまう。むしろ他の子どもが原理原則に返って考える機会と捉えることが必要。芝居をして、「これ76だから、先生も「ななじゅうろく」と読んで良いと思うけど、どうしていけないの、説明して

よ」。これだけで1時間授業ができる。生徒に投げかける授業をすると、子どもたちは何とか説得しようとして考えて、結局、位取り十進法の原理原則を子どもたち自身が明らかにしてくれる。このような取り上げ方をするだけで、授業の様相が変わる。

市長が言うように、考えるというのはそういうことだと思う。どうしてそうなのか、そうしなくてはならない理由を考えることが大事。

学力の話に戻ると、理科は、中学校では実験をよくやってくれているが、小学校では少ない。その原因を分析すると、教科担任の問題にいきつく。小学校では、専門教科でない先生が全てをやらなくてはいけないということがある。専門でやってほしいという教科で手を挙げさせると、音楽、図工、理科が多い。これについては小中高連携で、夏に高校で小学校の先生を集めて理科の実験のやり方や教材開発をやってくれている。こういうことをもっと進めていくことで、理科免許を持っていない先生も意欲的に理科の授業を進めていける糧となる。

(教育長)

ところで、国語が弱いのはどうしてだろう。書かせることや、他の考えと比較させて自分の考えをまた整理し直すというようなことが、あまり取り入れられていないのか。

(市長)

読んだことをイメージして自分の頭の中に社会を作るという作業が苦手なようだ。漫画がはびこりすぎて、想像してごらんよというと、その想像が一番難しい。

(渡辺委員)

教科書が結構ビジュアルになっている。ビジュアルにしてしまうと想像性が欠けてくる。頭の中で立体構造が作れず、ビジュアルになってしまう。認知症でも言っているが、テレビを見ていると、目と耳と両方取られて自分で考えなくなってしまうので、ラジオにしないさい。ビジュアルは、説明するのに非常に良いツールではある半面、教育的には良くないのではないか。

(市長)

イメージした後で、リアルにはこうだよというのには良い。

(朝倉委員)

分からない人は、先に映画を見てから本を読むというイメージというような。

(市長)

それじゃ分かったことにはならない。昔の子どもたちは、テレビで見たことの真似ができた。王貞治の打撃フォームとか。今の子どもたちは見ても真似ができない。あまりに情報が多く、どこを見るべきか、何が大事なのかピンポイントで見抜く力がなくなっている。国語の教科書から絵の部分を抜いてもらうのは、どうだろうか。

(朝倉委員)

絵のない本を選んで、この場面ではどうなのかという絵を描かせる。

(教育長)

小学校の道徳や国語の授業で、プリント資料で何も書いてない吹き出しに子どもに書かせる取り組みがある。この子のその場面での心情やどういう言葉を使うかなどを書かせる場面を見た。

(市長)

私など理系の人間は、思考してきたことを自分なりに絵やグラフにしてみる事が大事。出てきた結果からピンポイントで共通すること、相違点を抜き出すのが仕事。そういう能力も、先ほどの勝手に絵が作られているものでは養えない能力なのか。

(朝倉委員)

算数の文章題でも、絵というか場面というか、それを図表にするということを小学校でもやっていた。先生の説明を聞いて、なるほど違う方法もあるのだなと思った。子どもたちがそちらの方へ誘引された形でなく、自分自身で考えて解いていくというところまでの力を育てられると良いと感じた。

(市長)

その能力とは、実は数学なんか、難しい数学になればなるほど必要になってくる。しかも、その中で大事な事だけシンプルにして、自分でそのシンプルな状況だけを作り出すことができる、数学の問題の難しいことの本質がすごく鮮明に見えてくるのが沢山ある。最初から与えられてしまうと、全部の情報に関わって何に焦点を当ててみるかということができなくなり、数学、物理はすべて解けなくなってしまう。

(教育長)

全て条件が提示された問題ばかりで訓練するのではなく、条件不足の問題もたまに取り組みませ、何がないとできないかを考えさせる授業も大事。閉じられた問題だけでなく開かれた問題も大事。

(市長)

そういう教科書になっているかというところはどうなのでしょう。

(事務局)

だいぶ考えさせる内容には変わってきています。

(市長)

小学校の時の記憶で言うと、自分で間違ってもいいから情景を考えるという子の方が伸びた。

(高橋委員)

先生が実感できる場面があると良いですね。研究授業の中で、教科書にこの詩があるが、あえて文字だけの中で教科書を閉じてやって見るとどうだ、というような授業があると良いのか。

(朝倉委員)

国語力で、読んで情景を目に浮かばせるという力があると、数学でも物理でも社会でも理解が早いのかな。

(渡辺委員)

国語ができないと数学もできない。

(芳賀委員)

これ実は、今、皆さんすごいことをやっている。何も文字がないのに言葉だけが飛びかかってコミュニケーションをしている。誰が何を言ったかと全部頭の中で整理をして、でもそうじゃないと思うこともあったりして。だからコミュニケーション力がないというのは、言葉で消えちゃうものが拾えない。だから、やりとりできないし、しゃべれない。イメージする力を育てないと伸びない。

文字は見れば分かる、遅れても。ラジオは良いというのはなるほどなと思う。見えないものが想像できなくなってきたのか。

(朝倉委員)

大学の先生など、私らの頃はキーワードしか書かないので、メモって自分でまとめなくてはいけなかった。今の子は、分からないからちゃんと書いて下さいと言うので文章で書かなくてはならない。それを一生懸命写していくだけで理解していない。良くない教育をしていると思いきれんまがある。

(教育長)

今回、教職員も問題意識を持っていただき、しっかり問題分析もし、機運は盛り上がっているので、授業改善に役立てていただきたい。

(市長)

ぜひ授業始まる前に、例えば10分間目を閉じて先生が何か語って、耳から入ったもので連想する、イメージすることを皆で議論する授業もしてほしい。

(市長)

次に協議事項2「子どもを取り巻く教育環境の現状について」に移ります。事務局から説明をしてください。

■教育政策課長 協議事項第2号について説明（別添資料）

(渡辺委員)

発達障害で医師の診断がない人が多いがどういうことか。

(事務局)

これは発達障害に関する項目について、例えば「放課中に暴れている状況がありますか」などの項目について、学校の担任が点数を付けたものです。正式に医師にはかかっていませんが、学校の判断がこれです。

(渡辺委員)

発達障害は、ぜひ専門医にかかって治療することが大事。確かに児童精神科医は少なく

て、なかなか予約を取るにしても何カ月もかかりますので、受診しづらいという状況はあります。

(事務局)

もう一つ難しいのは、なかなか教師側から保護者へ医師にかかるということを言いにくい状況があります。

(市長)

「事象としてこういう行動がありますよ」ということは言えるのでしょうか。それを保護者がどうとらえるか。

(事務局)

それは言えます。ただし、どこの医師にということまでは言えない。

(渡辺委員)

発達障害というのはスペクトラムですので線は引けない。ただし、サポートしないとその子の将来がかかっていますから。かつてはそういうキャラクターの子であると言っていたのが、病名として出てしまったのでそこが難しいが、そういう子たちにも向き合っていく必要がある。

(市長)

学校の先生に、幼少期、児童期においてはこういうことに注意をして成長をサポートしなくてはならないという障害に対しての研修、講習はあるか。

(教育長)

各校が、事例研究会などを催して、校内サポート主任が臨床心理士などを講師に招き、この子の場合にはどういう対応をしていったら良いのかなどの研修をやっている。

また、特別支援教育を中心として、特別に配慮の必要な子どもには、「個別的教育支援計画」を作るようにしている。その時に保護者や医師からの情報の中でどういう対応、配慮をしていったら良いのかなどをつなごうとしてやっている。

(渡辺委員)

もう少し児童精神科の先生と話し合う機会があるといいのか。対応を間違えてしまうと教育にならない。

(高橋委員)

特性を知ることによって対処方法がある。本人たちは不安だからそうなっているという面もあるのか。

(朝倉委員)

もともと障害はないのに、いわゆる鬱から閉じこもりになる子もあるのではないか。

(渡辺委員)

そういう子はしっかりと治療すれば治る。そういう子も中には含まれているが、発達障害は増えているわけではなく、昔から一定割合でいた。社会がそれをあぶり出してしまった。

(市長)

あと、貧困家庭の子どもへの取り組みはうまくいっているか。

(教育長)

今、手を入れ始めているが、基本的な考え方を市長と共有したいと思っていた。学力の問題は今までやってきたが、体力の方はトップアスリートなどの上位者はかなりいて良いが、1週間で1時間も体を動かさない子どもの率が多く、分布がフタコブラクダになっている。学校教育の中での使命、任務は、体を動かしたり、友達と集団でゲームをしたりするといったようなことは面白いということ、体験を通して実感させること。

今は体験をお金で買う時代になってしまった。学校5日制になって、子どもが学力でいえば塾へ行ける子と行けない子がいるように、土曜、日曜にスポーツクラブやサッカークラブに入れる子、入れない子の体験量の格差が広がっている。これを埋めて補完していくことを行政が全部やるのは無理で、行政はその仕掛けをどうやるか。

地域の希薄化などのデメリットは、そういう意味で言えば逆にチャンスでもある。虐待、育児放棄の問題にしても、地域コミュニティの中で隣にどんな人が住んでいるか分からないという状況で、直接「あなたの家庭の教育がおかしいから何とかしなさい」と言っても糠に釘。となれば、地域のコミュニティを今の時代の中でどう復活させ、補完するか。来年度、羽根井地区がやっているようなことも含め、大清水のミナクルでもやる。

先日、「スポーツ鬼ごっこ」を見たが、頭を使い運動量もあり非常に面白かった。ああいうようなことも生涯学習の中で、地域の方が基本的な運動やミニゲームなどの講座をやったり、学習の部分を大学生がボランティアで関わったりするような仕組みが必要。行政が仕掛けを作って補完するしか、今の体験量の格差を埋めるのは難しいのではないか。

(市長)

昔は、学校が終わると、地域の中で子どもが神社などに集まり、自分たちでルールを決めて遊ぶというのが普通だった。今の子どもたちはそういう体験をしていないので、こちらが仕掛けないとそういう体験ができない。ルールを自分たちで決めることも、例えば足の不自由な子がいたら自然とその子に配慮したルールを考え、自然と学ぶ場でもあった。渡辺委員のやってみえる「おやじの会」は、その場の提供なのかなと感じている。

(教育長)

異年齢の集団で具体的な体験を通して学ぶ場、教育的な付加価値はあります。

(渡辺委員)

動物園で「逃走中」という鬼ごっこをやるのですが、すごく人気があって親も子どもも走ります。ただ一つ問題は、走らせると転ぶことがある。

(市長)

その時、保護者とどのようにかかわるかも課題です。

(教育長)

責任問題や裁判まで発展する場合がある。

(朝倉委員)

それが怖くてやらせられなくなってしまう。

(高橋委員)

私たちも言われますよ。川遊びをさせると楽しいから子どもたちが来るようになるが、必ず電話が学校に入る。「子どもが川で遊んでいるが大丈夫か」と。地域の話で、こことここが対立しているといった場合でも、個人でつながるといったことを積み重ねるしかない。全然よそ者同士で知らないときでも、どこかを介すのではなく直接つながることで、「実はいい人じゃん」というようなことを増やしていくことが大事。

(朝倉委員)

体験量について言うと、親は面倒だから子どもが家にいてテレビを見たりゲームをしたりしていれば、目が届いているので安心している。しかし、体験や人とのつながり、体を動かすこともなく、良い子だけれど少しも面白くない子どもが増えているのではないか。

(高橋委員)

真面目ですよ、今の子。大学を出た子は、良い意味でも悪い意味でも素直。素直だから、言ったことは比較的ちゃんとやるが、言わないと動かない。

(市長)

失敗しないと成長しない。学校では失敗する機会が少ないのかな。

(教育長)

順位を付けないということが一時はやったが、私は競技では順位を付けることも大事だと思う。ただ、それが全てでやってはいけない、去年よりどう伸びたかという努力を認める仕掛けも必要。

(渡辺委員)

武道では、勝っても負けても礼を失しない。勝負は時の運、それで切磋琢磨していく。ただオリンピックが金メダル至上主義で、銀メダル銅メダルはダメだという考え方はおかしい。勝つことは大事だが、その場において頑張ることが大事。

(教育長)

失敗を経験することは大事なのに、家庭でも学校でも、失敗をさせない。大人が子どもを囲い込みすぎている。取り返しがつかないことでなければ、そういうことを通して成長させたい。

(朝倉委員)

負けて悔しいという部分で、悔しいという気持ち起きない子、「負けたわ」で終わる子。「逆上がりができないのが悔しい」と考えると頑張れるのですが、そこで頑張らない子も出てくるのか。「今まではここまでだったのに、もう少しだ」という部分まで、付き添ってあげられる先生の時間があるのかな。

(市長)

できるようになって、一步階段を上った喜び。環境によって成功体験を積める機会が減るのは問題。小さな成功体験を積み重ねる場を提供することが必要。

(教育長)

団塊世代が大量退職し、元気な大人が地域に戻ってくるという恵まれた環境を地域のコミュニティで活用する。行政がその補完をできるような仕掛けをする必要がある。

(市長)

今、私たちが提供しているのは基本的には地域の大人、リタイヤした三世代の一番上の世代の方、そのかわり方が大事。そのためには個々の自治体やコミュニティがしっかりしていることが大前提。そうならない地域がだいぶあるように感じるので、できるところからやっていき、それを見てもらって他の地域が学んでいくという仕掛けがある。

学力では、サポートの部分で先生OBにも応援してもらおう場面も考えられる。

(渡辺委員)

高齢者には結構お金が流れるのに、何故か子ども関係にはなかなか流れない。そこで高齢者と子どもを一緒にすることで、子どもにもお金が流れる仕組みができたらいいか。

(市長)

今、高齢者がシルバーボランティアでやっていることといえば、掃除とか草刈とか花を植えたりです。実は、その方たちが持っているスキルで、おもちゃを直したり、実験の手伝いができたり、色々なスキルを持っている人がたくさんいる。先日、大崎小学校で、シルバーボランティアの方たちに図書館のいすや本棚を作ってもらった。

結構活躍する場面はあるので、私たちが上手に考えて、高齢者のために使われるお金を使って子どもたちの教育に活かす。高齢者が自分の能力を活かしてやりがいのあることをやることで、満足度を高め、頭や体を動かすことで長生きもできる。

(教育長)

それにかかわって、新規事業で生涯学習課が一生懸命考えています。機構改革によって子ども未来部と別れたが、教育委員会として一番力を入れていきたい事業です。

(市長)

それは、広域問題を含めて一緒。自治会長さんがしっかりコントロールしている地域はとても色々なことに前向きに取り組んでいただき、我々も一緒に取り組むことで成果が大きい。

(教育長)

自治会長は、町作りをどうするかという各校区の首長ですから。

(朝倉委員)

全部が同じようにやるのではなく、だんだん成功例を増やして、うちもできるのではないのと思ってもらおう。

(市長)

それでは、協議事項3「今後の協議事項について」事務局から説明をして下さい。

■教育政策課長 協議事項第3号について説明（別添資料）

（教育政策課長）

今回の第4回は、11月中旬に予定しています。教育の大綱と教育振興基本計画をメインにお願いしたい。また、キーワードを色々いただきましたので、事務局で整理させていただきます。その会議が終わった後に予算についての話し合いをお願いしたい。

（市長）

予算については、どんな課題を抱え、それにどう対処しようとしているかについてご意見をいただき、予算当局として皆さんと議論をしていきたい。

（事務局）

学力・体力の問題や土曜日の教育活動、高根小学校の問題にも言及していきたい。

（市長）

次に協議事項4「その他」についてですが、何かありますか。

なければ、報告事項「新教育委員会制度への移行（総合教育会議、大綱、新教育長）に関する調査について」を事務局から説明をして下さい。

■政策教育課長 報告事項について説明（別添資料）

（市長）

以上をもちまして第3回総合教育会議を終了させていただきます。

連絡事項

- ・次回開催日程

平成27年11月12日（木）午後3時から市役所西館7階第2会議室